

琉球大学学術リポジトリ

琉球大学教育学部附属中学校校内研における教師の
学び -校内研後の記述の分析より-

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学教職センター 公開日: 2024-04-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 江藤, 真生子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002020269

琉球大学教育学部附属中学校校内研における教師の学び

—校内研後の記述の分析より—

江藤真生子

A Study on Teachers' Learning in-School Training on Junior High School Attached the Faculty of Education, University of the Ryukyus

Makiko ETO

1. はじめに

1.1 研究の目的

校内研修における授業実践研究は、組織として教師の実践的力量を形成・向上するために重要な役割を担い、そこには教師が自律的に学ぶ校内研修が求められている(文部科学省, 2021)。また、急激な変化を伴う社会における学校教育を担うための力量形成として多様な校内研修が行われていると同時に、非日常化や他律的であることの課題がこれまでに指摘されてきた(佐藤, 1996; 秋田, 2009)。このような中で、伊良波(2021)と上江洲ら(2021)は、「自律的」で「共同的」な「校内研」のデザインをどう進めていけばよいかという視点で、琉球大学教育学部附属中学校(以下、附属中学校と示す)の校内研を「研究史」として理論変遷を辿り、創立当初からの理論や取り組みを紐解いた。これらにより、附属中学校校内研に教師の学び合う関係性を醸成する基盤があることが示された。「自律的」で「共同的」な「校内研」のデザインをより具体的にイメージするために、このような基盤のもとで教師がどのように学んでいるのか具体的に実証する必要があると考える。

そこで本稿では、教師の問題意識が始点となる「自律的」で「共同的」な「研究」の素地を豊かに生かした校内研(伊良波, 2021)の在り方を探るために、附属中学校の校内研における取り組みを教師の学びの視点から検討し、校内研における教師の学びを実証的に明らかにすることを目的とした。

1.2 附属中学校の校内研

里井氏は、附属中学校の校内研の展望を次のように述べた(上江洲ほか, 2021)。附属中学校では、校内研として第2期以降「同僚から学ぶ」共同的な研究を進めてきた背景から、教師間で学び合う関係性が醸成されてきた。附属中学校の研究には、教師と生徒、生徒と生徒、教師と教師が探求する構成主義的な授業やカリキュラムを反映したテーマが掲げられてきた。また、第10期以降の附属中学校校内研の年間計画では、理論面の学修(以下、理論研と示す)と授業研究会(以下、授業研と示す)が計画されていた。さらに、組織的な取り組みとして、授業研で教師が担当する教科の壁を越え、生徒の「みとり」を基軸に進めるために、授業者ではない教師が生徒役で授業を受ける模擬授業を伴う指導案検討会やネットワーク型校内研となるグループによる授業研が行われてきた。さらに、第9期から継続して、グループにより学び合う教師の関係性を維持し、授業実践後の授業研究会を「Yuntaku(以下、ユンタク)」と称し、「誰もが畏まらず、排除されず、話しやすい自由の雰囲気为保障するイメージ」で振り返りを行った。このように附属中学校では、教師の学び合う関係性や協働的な取り組みを基盤とし、同僚性や教師間の支持的

風土が醸成されてきた。

なお、附属中学校研究紀要では、創立当初の1990年代に教師が共同して行う研究として「共同的」と称されていたが、教師が共に研究を追求することの意味として捉えられることから近年では「協働的」と称している。したがって、本稿においては、「協働」を教師間の学び合いや同僚性のもとに取り組むこととして使用する。また、教師の学びや成長という観点において、附属中学校校内研の教師同士の学び合う関係性は重要なキーワードであり、「協働」を捉える要素となると考えられる。そこで表1に、教師の学びを支える「協働」のための取り組みがどのように行われてきたのかという視点で、伊良波(2021)及び上江洲ほか(2021)ならびにこれまでの附属中学校研究紀要総論における記載事項を抜粋した。

1.3 第11期の研究（テーマ「学びに向かう力をはぐくむ」）

2020年度より「学びに向かう力をはぐくむ」が研究テーマとなった。テーマは、2020年4月の研究推進準備委員会（当時、研究推進委員会での議題等を準備・検討する組織で附属中学校の教師のみで構成された組織）と研究推進委員会（当時、大学教員を構成員に含む組織）を経て、校内研で全教師承認のもと設定された。新たなテーマで第11期をスタートしたものの、2020年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、校内研前半及び11月の研究発表会における授業研究会は実施できず、11月の研究発表会は教科研究発表会としてオンラインで行われた。

表1 教師の学びを支える「協働」のための取り組み

期	テーマ	「協働」のための取り組みに関するキーワード
1	自発的に学びとる力を形成する授業の工夫	（研究の視点：教師・教材・生徒の授業の三要素をどのように有機的に機能させるか）
2	学習意欲を高める授業の工夫	同僚から学ぶ、称賛型（相手の意図することをなるべく吸い上げる方向で、お互いにアドバイスしあい、完成度を増していく話し合い）、個人・領域・グループ単位
3	生きる力—問題解決の力—を育む	全教官共同研究（研究行事：スポレク週間）
4	ともに生きる力—学び合う力—をはぐくむ	学び・学び合いの捉え、共同体—生徒・教師、教師同士の学び合い、総合的な時間の学習
5	学び合う力をはぐくむカリキュラムのデザイン	教師自身が学びの集団、年に1回は同僚に授業を公開・授業交流会、グループ討議、編成：学年・教科・文科系・理系・実技系、くじ引き—原動力へ
6	学び合う授業づくり	日常、教科を超えた、学年中心のグループ研究（+班研究会、日常化・習慣化を図る、小グループ研）、公立への公開授業、教師間、グループ間の探究を交流し合うことで研究史の質的な向上を図るネットワーク型
7	基礎・基本の習得と活用能力をはぐくむ	全体・班・教科研究会（特別活動、道徳、総合的な学習）・ここ数年の教科教育中心の展開に十全的な発達に限界が感じられた。全体研究会・公開授業研（他校・保護者）、教師たちも教育の専門家として学び合う
8	実生活に活かす力をはぐくむ授業の創造	授業をみる視点（指導案、内容・方法、生徒の様子）、実生活→各教科、学部との連携
9	未来を切り拓く対話からの学び—協調学習による個を活かす授業づくり	教師の協調的な学び合い、ユンタク（誰もががかしこまらず、排除されず、話しやすい自由な雰囲気保障がイメージされる授業研究会）、夏季研修で知識構成型ジグソー法
10	21世紀型思考力の育成	教科を超えた模擬授業・指導案検討会、ユンタク

表 2 2021 年度前半校内研計画

回	区分	内容	模擬授業・ 指導案検討会	参加人数
第 1 回	理論研	講話：校内研のあり方について (講師：大学教員)		18 名
第 2 回		講話：道徳 (講師：大学教員)		21 名
第 3 回		特別支援教育・保健室から見る 生徒の現状 (講師：養護教諭, 特別支援教育コーディネータ ー)		21 名
第 4 回	授業研 (全体)	道徳授業		20 名
		第 5 回の授業①・②の指導案検討会		
第 5 回	授業研 (2 グル プ・ zoom)	教科授業 5-①	第 6 回の 授業①・②	6 名
		教科授業 5-②		10 名
教科授業 6-①		第 7 回の 授業①・②	8 名	
教科授業 6-②			9 名	
第 7 回		教科授業 7-①	第 8 回の 授業①・②	8 名
		教科授業 7-②		8 名
第 8 回		教科授業 8-①		9 名
		教科授業 8-②		6 名

2021 年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、授業研を他校に公開せず附属中学校の教師のみの参加で、11 月の研究発表会はオンラインで行われた。表 2 は、2021 年度の校内研の年間計画とその概要を示している。2021 年度は、4 月から 7 月までに理論研と授業研に取り組んだ。理論研は、大学教員による講話 (校内研・授業研究について、道徳授業について) を 2 回、養護教諭及び特別支援コーディネーターによる講話を 1 回の計 3 回であった。

授業研は、1 名の教員が道徳授業を実践した第 4 回と、各回で 2 名の教師が各教科の授業実践を行った第 5 回～第 8 回までの計 5 回であった。各教科の授業研では、授業者以外の教師は 2 つのグループに分かれ授業観察を行った。授業研を行う際には、授業実践する前の回の校内研で模擬授業・指導案検討会を行った。模擬授業・指導案検討会では、2 つの授業実践を観察するグループに分かれ、模擬授業の体験や教材の検討を行った。全ての教師が自身の担当教科だけでなく、他教科の授業実践を観察した。2 つの授業実践後には各場所でユンタクを行い、その後、授業観察を行った教師は、コメント&リフレクションカード (A4 サイズ半分の大きさ) に感想・意見を記述した。この記述は、研究主任が回収し、授業観察を行った教師からの協働的省察の記録として授業実践した教師へ渡していた。

2. 研究の方法

2.1 対象

附属中学校に所属する教師は、校内研に参加する各教科及び養護教諭を合わせ 22 名であった。教師の所属年数は 1 年目 4 名、2 年目 6 名、3 年目 5 名、4 年目 3 名、5 年目 4 名であった。

倫理的配慮について、著者が附属中学校に赴き、文書及び口頭で研究の趣旨及び方法、個人情報保護に関する説明を職員会議で行った。2週間の回収期間を設け、設置した回収用封筒に研究協力への諾否の文書を受領した。22名すべての教師から文書にて研究協力への承諾を頂いた。なお、本研究は、本学の人を対象とした研究倫理審査委員会による審査を受け承認された研究（承認番号38）の一環として行われた。

2.2 資料の収集

校内研の各回後に教師が記述した「コメント&リフレクションカード」について、講師や授業者への謝辞や授業実践への労いに関する記述を除いた内容をデータとして収集した。授業研では、9つの授業実践が行われ、授業を実践する教師は9名（以下、授業者と示す）で、それ以外の教師は授業実践を観察（以下、観察者と示す）した。半数以上の教師は授業実践を観察することで学んでいた。教師は参加した校内研を振り返ることで、自身の実践や考えと照らし合わせたりして学びを自覚したりしていると考えられる。このように振り返りには教師の学びやその自覚があらわれると考えられる。したがって、本研究では校内研における教師の学びを実証するために、校内研後の振り返りの記述をデータとして収集した。また、当該年度の校内研をまとめた2021年度琉球大学教育学部附属中学校研究紀要「研究総論」をデータとして収集した。

2.3 データの分析

本研究では、校内研後の「コメント&リフレクションカード」の記述に対して、教師が何を振り返り、どのような考えや意思を持ったのか、また、授業を観察して生徒の学びをどのようにみとったのかという教師の学びを質的方法により分析した。分析に際して、内容の性質から第1回から第3回までの理論研と第4回の授業研（道徳）、第5回から第8回までの授業研（教科）を区別し分析を行った。

分析は、佐藤（2008）を参考に、教師個人の記述から下位概念及び概念カテゴリーを生成し、文脈に即し下位概念及び概念カテゴリーの関係を示し概念モデルを構築した。具体的には、まず、教師個人を行に設定し、各回の記述について内容のまとまりごとに区切りコード名を付し（下位概念）、文書-コード・マトリックスを作成した。そして、「複数のデータ間、データとコードの間、複数のコード間で何度となく比較検討を繰り返すことによって、共通のコードを分析し、物事や出来事における一定のパターンやある種の規則性を割り出した。さらに、これらをもとに事例-コード・マトリックスを作成し事例（概念カテゴリー）を生成した（佐藤，2008）。」

また、授業研後の観察者の記述には、授業の営みや生徒の学びの様子を豊かにみとる内容がみられたため、このような授業場面をみとる視点として実践的思考様式（佐藤，1990）を参考とした。佐藤（1990）によると、教師は、実践的知識を基礎として営まれる実践的な状況への関与と問題の発見、表象、解決といった授業場面等において特有の思考様式を形成し、機能させている。また、佐藤（1990）や秋田（1991）を参考に、授業場面をみとる視点に「事実」「印象」「推論」「状況的思考」を設定した。佐藤（1990）・秋田（1991）によると、「事実」とは誰が見ても明らかな教師や生徒の行為・行動、様子等である。「印象」とは、教師や生徒の行為・行動、様子への印象や評価を示しているが、そのように考える根拠や理由は述べていないことである。実践的思考様式となる「推論」とは、理由や根拠を伴って、印象や評価を述べたり、教師や生徒の発言の意図や考えていたりしていることを推察していることである。「状況的思考」とは、教室の雰囲気や状況、生徒の身体の空気やリズム、テンポ等について感性的に捉えた様子を示している。附属中学校の校内研で観察者の教師が授業の営みや生徒の学びをみとるために、このような実践的思考を働かせていることが推察された。なお、佐藤（1990）や秋田（1991）では、上記の実践的思考様式

の特徴のほかに、即興的思考や多角的思考を挙げている。即興的思考については、本研究では、ユンタク後の教師の振り返りの記述をデータとしているため即興性について言及することはできない。また、多角的思考については、熟練教師は、教授や学習のいずれかに偏ることなく多角的思考を働かせることを指摘している。しかしながら、附属中学校では生徒が主体的に学ぶ姿をほぐくむことを探究する研究を行っているため、生徒の学習に視点が偏ることが推察された。

3. 結果と考察

3.1 校内研における教師の学びの概念間の関係

図1は、校内研後の教師の記述から生成した概念カテゴリー及び下位概念間の関係を概念モデル(案)として示した。理論研と道徳授業研では、教師自身の経験を振り返るとともに研究の見通しを持ち、生徒の学びをみとる視点や指導・授業に対する考えを形成していた。これらを基盤に、授業研での協働的な取り組みにより、授業を実践したり実践的思考様式を働かせたりする教師の学びの姿が導き出された。また、これらの学びは、安心して取り組める環境であることや附属中学校の役割の自覚に支えられていることが示された。

3.2 理論研と道徳授業研における学び

図1中の理論研と道徳授業研において生成された下位概念と概念カテゴリーの関係性を述べ、代表的なものとして捉えられるデータを示した。以下、【 】は概念カテゴリーを、[]は下位概念を示した。教師の記述例については、文頭の数字は文書セグメント(データ)番号を示し、文中下線は概念カテゴリー及び下位概念への対応箇所を示した。

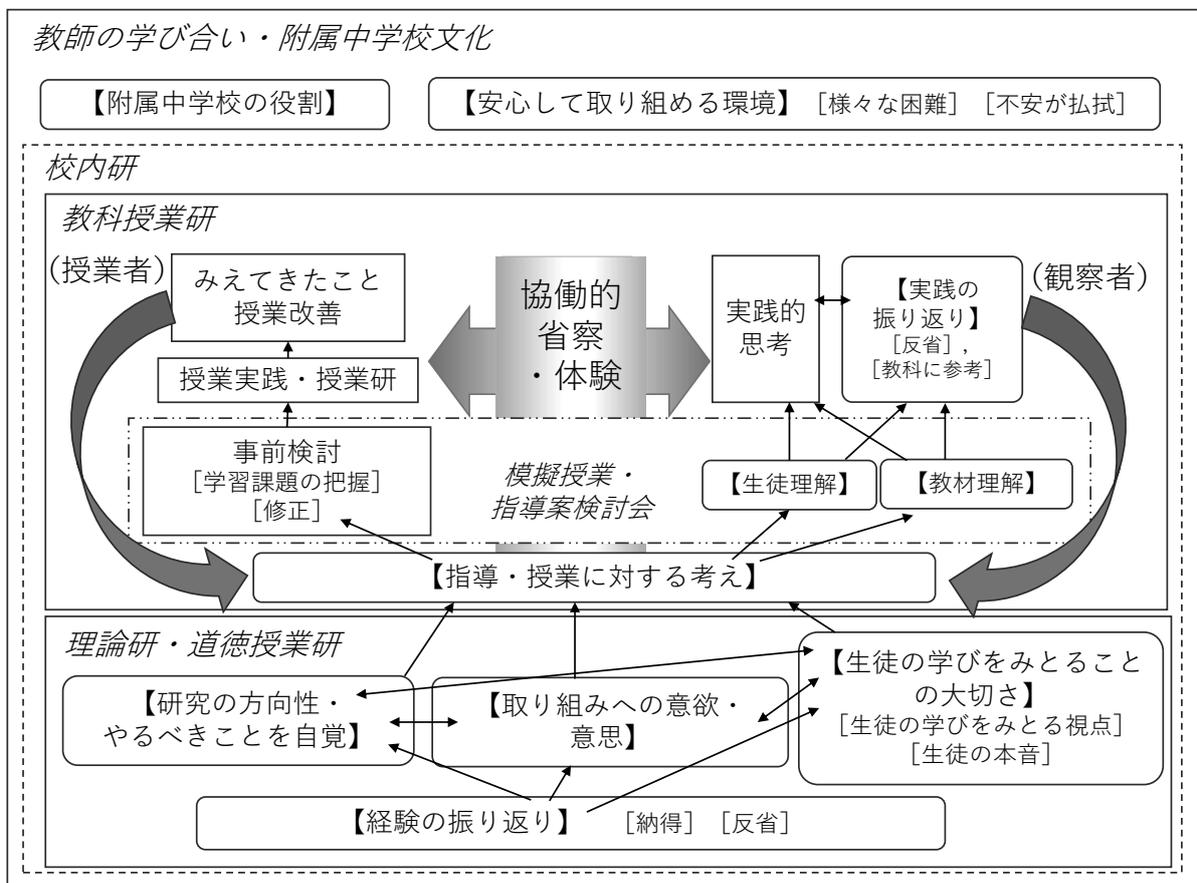


図1 附属中学校校内研における教師の学びに関する概念モデル(案)

まず、これまでの【経験の振り返り】（[納得][反省]）から【研究の方向性・やるべきことを自覚】することや【取り組みへの意欲・意思】を持つことにつながったことがうかがえた。

21：附属に来て、まさに私の研究に対する姿勢が業務化・形骸化・非日常化だった気がします。今年はまだ一度、生徒の中に入ってたくさん話を聞いて、実態を知って、研究に取り組んでいこうと思いました。

101：研究や授業計画を立てるとき、どうしても手立てや方法を優先してしまい、生徒の姿を置き去りにしてしまうことがあったなど反省しました。まだ生徒にも合っていないので不安しかありませんが、理想の学び方を目指して周りの教師からたくさん学びたいと思います。

次に、【生徒の学びをみとることの大切さ】については、研究テーマのもと、[生徒の学びをみとる視点]を理解するとともに、これまで取り組んできた実践に対して、否定的な捉え方があることを[生徒の本音]という形で理解したことが、【生徒の学びをみとることの大切さ】をより実感したことにつながったと考えられた。さらに、このような生徒の実態とそれに対する反省が、生徒の学びを大切にしたい（しなければならない）という【やるべきことを自覚】や【取り組みへの意思】につながったと考えられた。

83：保健室に来室する生徒の声、保健室からの情報をもとに自分も学級経営や授業に活かしていると再確認することができ、重要性が実感できた。特支の講義では、生徒の多様性を受容し、適切な対応の必要性を改めて知ることができた。学級でも、個性を大切に、を生徒と共有しているので、学級全体、学校全体がそんな考えを持ったら素敵だと思う。

153：生徒のつぶやきをしっかり受け止めていきたいと思った。話からは心に刺さるお言葉がたくさんありましたが、特に大切にしていきたいことは、いるだけでありがとうという姿勢・意識でいるということです。目の前の生徒の気持ちを受け止め、ニーズをキャッチして行きたい。附属らしい、ユニバーサルデザインを校内研修などでみんなで考えを作っていけるといいなと思いました。

これらから、[納得]や【やるべきことを自覚】することを経て前向きな【取り組みへの意欲・意思】ならびに【生徒の学びをみとることの大切さ】の理解に加えて、教師自身の【指導や授業に対する考え】を形成していることがうかがえた。

72：（中略）道徳の内容項目に固執しすぎないこと（正しく固執する）、教材は生徒に共通の考える場を提供するもので、教材を読み違えないことなど、今後、意識して授業改善につなげていきたいと思いました。また、会話における吟味を意識して、考えを述べ合う場面においては理由とその精度についても働きかけたいと思います。

172：資料に即して同じような状況を考えてみるという話が一番ヒントになったような気がします。教材を読み込んで授業を作っていくときに、色々な面を考え、教師同士で議論することも多いですが、言葉や表面にとらわれない、その資料が持つ意味を常に考えたいと思います。

さらに、附属中学校ならでは環境について、公立を見据えた【附属中学校の役割】として、「附属中学校（の教師）は公立学校に対して研究を通してアドバイスできる」ことや「公立を意識し

て」いくことを感じていることがうかがえた。

131：私がやってみたいことの見通しを考えることができた。探求，どうやって生徒を動かす，学ばせる，一緒に活動できる，みとりなど。まずはやってみたいと思うことができた。(中略) 今年は特に公立を見据えた研究にしたい。

181：これまで研究推進準備委員会でたくさん読んできた東雲だよりの内容が M 先生の講話によって自分の中にさらに入ってきた感じを受けました。最初に，公立の先生に附属の研究を通してどうアドバイスするのかを考えた時，より目の前の生徒の課題や公立を意識していかないといけないと思います。4月から授業をし，生徒の様子をしっかりとみて直接生徒に繋がる研究をしていきたいと思います。

研究や取り組みに自覚や意思を持ったり，指導や授業に対する考えを持ち前向きな態度を示したりする背景として，教師には[様々な困難]を感じながらも[不安が払拭]される【安心して取り組める環境】があることがうかがえた。また，島袋ら(2022)では行事での取り組みを事例に挙げており，このような環境が支持的風土として引き継がれていることが示唆された。附属中学校の特性や前述の[様々な困難]や不安を抱えている状況にあることが，教師集団として仲間との関係性をより意識しようとしていることにつながっているのではないかと考えられた。

91：東雲だよりを1号から冊子を作り読み漁りました。様々な気づき，学びがありました。難しい取り組みや考え方があったことも事実でした。安心安全を土台に苦手群にスポットを当て主体的に取り組もうとしている様子がみられるようになりました。次は手立てを講じても動こうとしない女子生徒にスポットを当てて研究したいと思います。

31：公立で疑問に思っていたことや周りの教師に聞きづらくて聞けなかったことが，疑問に思っているんだ，口にしていいんだと道が開けた気分です。生徒が学びに向かうためにあらゆる手段に挑戦という姿勢，生徒の学び，成長を一番にという視点に立った授業，1人も漏らさずに学ばせることができる丁寧な関わり方と思想。目指すべきところはみえてきたのであとはそこに向かって進むのみです。今日のこの時間で今後の附属での自分の目指す場所とスタンスがみえました。

191：改めて何のための授業研究かと考える時間をいただきました。いよいよ生徒を迎えます。どのような生徒がいるのかきちんと丁寧に向き合っていきたいと思いました。研究というこの一言があるだけで業務化しようとしたり形骸化しようとしたり非日常化しようとしがちです。ぜひ目の前の生徒のより良い学びや成長の実現のためと念頭におきつつ授業を生徒と作っていききたいと思います。(中略) 附属はモデル校だとプレッシャーを感じました。しかしスライドの最後に示していただいた理想の学び方を示すという言葉で肩の荷が下りました。附属でも試してみることに失敗はない精神で頑張りたいと思います。

島袋ら：(中略) 職員は音楽教師の想いに応えようと，取り組みに対して協力的な雰囲気がある。職員のフォロワーシップがそこにある。音楽教師のリーダーシップのみならず職員のフォロワーシップの大事さが見えてくる。

3.3 教科授業研における学び

図1中の授業研で生成された下位概念及び概念カテゴリーの関係を述べる。まず，観察者の授業場面における生徒の学びをみとる視点の特徴を実践的思考様式に対応させ表3に示した。「事

実」は、生徒の意見の交流の様子や授業計画の沿った指導に関する内容であった。「印象」は、観察した教科の学びと自分の担当する教科での学びを繋げ様子を述べたり、学びの実態の根拠を述べずに、教師が評価したりする内容であった。「推論」は、生徒がスキルを自分のものにしていく様子や生徒の活動の様子から教師の手立てについて考えた内容であった。「状況的思考」とは、生徒の学びを感じ取り雰囲気を変えていった内容であった。

表3 授業場면을捉えた記述の具体例

授業場面の捉え	記述の具体例
事実	<ul style="list-style-type: none"> ・補助発問のところで口数が少ないグループでしたが自分では考えていたのかそこでは意見を言って話し合う姿がみられました。話はなかなかうまくいなくても自分で資料を読み取っていたようでした。 ・ペアやグループの使い方が上手ですね。問題把握も入れたはじめの6分間でペアの説明が2回入り、10分後には移動させたグループ活動に入っていました。時間をかけずに活動させ、後半の活動もゆったりできていたことにも勉強させられました。
印象	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ（ペア）によって進み方は違えど皆とても一生懸命楽しそうに取り組んでいたのが印象的でした。一生懸命ゆえに個人で活動させてみたらどのような雰囲気になったのかなとも考えました。 ・生徒Mを見ていましたが、彼の粘り強さが以前よりも成長しているように感じました。美術でも以前より課題に向き合っているのが土台がしっかりしたのでしょうか。
推論	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒Nを見ていました。コミュニケーション能力が元々ある生徒だと思いますが、今日の授業で改めて気づいた様子でした。「me too」とかリアクションしてもらおうと嬉しいと語っていました。生徒Sにも後半「会話を弾ませるにはどうしたらいいかって・・・」という風にbig questionを口にしていたので自分のモノにしている様子がわかりました。 ・手立てについてです。なんでもかんでも手立てがないと取り組めないのは主体的とは言えないのでは？というのとはとても納得し、対話させることが目的になるとそういう感じになってしまうと思いました。今日の3人は予報を出せていませんでした。出せていれば対話は必要なかったかと思いますが、結論を出せずにいたので何らかの手立てはやはりあった方が良かったかもしれません。または手立てはなくても自分達でどうにかするためのスキルを付けさせていくのかも今後必要かと思いました。
状況的思考	<ul style="list-style-type: none"> ・初めて1人の生徒を追いかけてみて「こういう時こう感じているんだ」「こんなに感性豊かなんだ」「友達の発言でこんなふうに思考が変わるんだ」と生徒の感じていることや考えていることがよくわかった。 ・「分かんない、大丈夫じゃない」から「描くの意外に楽しい」に変化する生徒の様子に私もうれしく感じました。生徒の楽しいがあふれていた授業だったように見えました。

また、模擬授業・指導案検討会で、生徒の視点でどのように学ぶのかや教材に対する解釈を考えたことをもとに、授業の省察を行う記述がみられた。さらに、授業場面の捉え方として、生徒の学びを捉えることと教師の教授を捉えることが相互作用する関係にあることがうかがえた。加えて、観察者はこれらの授業場面の捉えとともに、【実践の振り返り】を行い[反省]や[教科に参

考]としたいと考えていた。

次に授業実践者については、模擬授業・指導案検討会において、他教師から生徒の学びの視点をもとに助言を受け検討(事前検討)を行い、授業研での授業実践を行った。この過程において、事前検討で、生徒の学びを想定した[学習課題の把握]や思考を促すために[修正]することや工夫することを助言されていた。この助言を踏まえ、計画を修正し授業実践を行った。授業実践後には、グループで協働的なリフレクションにより、多様な教師の視点から授業を振り返った。授業実践者は、授業改善として、授業の計画や生徒の学びに即した教授が必要であること等を振り返った。また、授業研から見えてきたこととして、生徒の学びの広がりや深まりのみとり方、生徒の学びへの支援となる教授や課題設定の工夫、生徒の学びを深めることをどのように捉え、支援するかといったことを振り返った。

4. 成果と今後の展望

本稿では、附属中学校の校内研の理論研及び道徳授業研と、教科授業研を区別して分析し、教師の学びの概念モデル(案)を示すことができた。本稿で対象とした時期は単年度の取り組みではあったが、附属中学校の校内研には、里井氏が指摘する教師の学び合う関係性や協働的な取り組みが基盤となっていたことが実証された。しかしながら、指導や授業に対する考えと授業実践(授業者)との関係について検討できなかったことは今後の課題である。このことは、振り返りの記述と研究紀要をデータとした本研究の限界である。教師の学びを成長としてみとめるためには、インタビュー調査や継続的な調査による、より詳細なデータの収集が必要と思われる。

謝辞

本稿の分析を進めるにあたり、本学名誉教授 里井洋一氏及び教職センター准教授 中園有希氏より有益な助言を頂きました。感謝申し上げます。

引用文献

- 秋田喜代美(2009) 教師教育から教師の学習過程研究への転回—マイクロ教育実践研究への変貌—。矢野智司他編 変貌する教育学, 世織書房。
- 秋田喜代美・佐藤学・岩川直樹(1991) 教師の授業に関する実践的知識の成長—熟練教師と初任教師の比較検討—。発達心理学研究, 2(2): 88-98.
- 稲垣忠・佐藤学(1996) 授業研究入門。岩波書店
- 伊良波剛(2021) 琉球大学教育学部附属中学校研究史—理論変遷と校内研の在り方(上)—。琉球大学教職センター紀要, (3): 117-128.
- 北田佳子(2011) 授業の省察における生徒固有名を伴う語りの機能—Shulmanの「学習共同体」モデルを手がかりに—。埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 10: 21-28.
- 文部科学省(2021)「令和の日本型学校教育」を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて 審議まとめ。 https://www.mext.go.jp/content/20211124-mxt_kyoikujinzai02-000019122_1.pdf (2023年11月20日参照)
- 琉球大学教育学部附属中学校実践実例(2021年度実施) 各教科授業研振り返り。 <https://www.jhs.u-ryukyu.ac.jp/jirei.php?> (2023年10月31日参照)
- 佐藤郁哉(2008) 質的データ分析法 原理・方法・実践・新曜社。
- 佐藤学・岩川直樹・秋田喜代美(1990) 教師の実践的思考様式に関する研究(1)—熟練教師と初任教師のモニタリングの比較を中心に—。東京大学教育学部紀要, 30: 178-198.
- 佐藤学・秋田喜代美・岩川直樹・吉村敏之(1991) 教師の実践的思考様式に関する研究(2)—思考過程の質的検討を中心に—。東京大学教育学部紀要, 31: 184-200.

島袋靖之ら(2022) 研究総論 学びに向かう力をはぐくむ(2年次). 琉球大学教育学部附属中学校研究紀要, (34) : 1-11.

上江洲朝男・江藤真生子・里井洋一(2021) 琉球大学教育学部附属中学校研究史—理論変遷と校内研の在り方(下) 一. 琉球大学教職センター紀要, (3) : 129-140.